

芥川龍之介全集

第十卷

芥川龍之介全集

第十卷

芥川龍之介全集 第十卷

第十回配本(全十二卷)

一九七八年五月二十二日 發行 ©

定價三二〇〇圓

著 者 芥川龍之介あぐたがわ りゆうの すけ

發行者 岩波雄二郎

發行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五

電話 三二六五、四二二
振替 東京六二六四〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

書
簡
一

明治三十九年

明治三十九年

一 八月七日 勝浦から 芥川道韋宛（繪葉書）

正午無事着身體さまで疲勞を覺えず 御安心下され度候

八月七日午後六時

勝浦ニテ

龍之介

二 八月九日 小湊から 芥川とも宛（繪葉書）

本日小湊ニ遊ビ日蓮上人ノ跡ヲ尋ヌ

八月九日

龍之介

三 八月九日 小湊から 芥川ふき宛（繪葉書）

誕生寺ニ遊ビ清海樓ニ晝飯ヲ認ム

八月九日

龍之介

四 八月十日 勝浦から 芥川河鹿宛 (繪葉書)

小湊より歸途夕立にあひづぶぬれに相成候明日歸宅の筈

勝浦ニテ 龍之介

五 二十三日(年次推定) 芥川宛 (繪葉書)

十時元箱根發駒ヶ嶽を左手に望みてゆく 空漸はれてはるかに白芙蓉の湖をへだてゝ聳ゆるを見る 富士の神色誠に平常に數十百倍するを覺え候 匆々

六 二十九日(年次推定) 上諏訪から 芥川備富貴宛 (繪葉書)

調劑丸をのみてより以來の便今日を以て漸く通じ五日ぶりのうんこを時にひり出し快絶大快絶に御座候此頃は少々家が戀しく相成夜、目のさめた時杯は殊になつかしく覺え候 匆々

二十九日朝

龍之介

明治四十二年

七 三月六日 本所から 廣瀬雄宛

肅啓 御手紙難有奉誦致し候ジャングルブツクは嘗て其中の二三を土肥春曙氏の譯したるを読み(少年世界にて)幼き頭腦に小さき勇ましきモングースや狼の子なるモーグリーや椰子の綠葉のかげに眠れる水牛や甘き風と暖なる日光とに溢れたる熱帶の風物の鮮なる印象をうけしものに御座候原作に接したきは山々に御座候へども目下の様子にては到底手におへなさうに候へばまづ／＼あきらめて Rosmersholm をこつ／＼字書をひき居り候

ロスメルスホルムと云へば此篇ほどメレジュコウスキの所謂「死の苦痛即ち生の苦痛」の空氣の痛切にあらはれたるは見ざる様に思はれ候英譯一冊にてイブセン通になる訣には無之候へどもボルクマンの懊惱。ゴーストの主人公の死。ドールスハウスのヒロインの決心。ザ、レデー、フロム、ザ、シーのヒロインの復活。皆この境に新生命の産聲をあげむとして叫び居り候へども殊に此ロスメルスホルムの男主人公と女主人公との最後ほど強く描かれたるは無之候ハウプトマンの「寂しき人々」は此作の感化を蒙る事多きよしに候へども嘗てよみたる「寂しき人々」の和譯にくらべてロスメルスホルムの方がはるかに力のつよき様に感ぜられ候

恨らくは泰西の名著も東海の豎子には中々の重荷にて字書をひきて下調べをするときは何の事やら少しも判然せず

明治四十二年

代る代る譯をつける時に辛うじて事件の一部が明になり三度獨りでよみ返して見てはじめて全事件を望み得る次第に御座候殊に序幕にては暗示的な言の連發をうけて一方ならず閉口致し候クオバデスもロスマルスホルムの間に繙き居り候へども中々抄らず時々先の頁を勘定してがっかり致し候

今日はクオバデスとロスマルスホルムとの難解の個所を伺ひに上る豫定の所朝より客來にて一日中榮螺の如く蹲りて目談り且論じ候まゝ遂に參上致し兼ね候此分にては雅邦會を訪ふも覺束なく相成目下は復活の後篇をよみ居り候談話部の龍頭蛇尾に陥りたる委員諸君の遺憾はさこそと察せられ候へども小生にとりては少くも天祐に御座候ひき、「批評の態度」の愚稿に先生の玉斧を請ひて御迷惑をかけ候夜は、歸宅後書いては消し書いては消し遂には筒井君の所へ電話をかくるに至り候「果斷ありと自ら誇りしが此果斷は順境にのみありて逆境にはあらず」其夜ひるがへして見たる「舞姫」の言我を欺かず候

これより學年試験の完るまでは一週間禁讀書禁遠歩の行者と相成る筈に候遠足は散歩にて間にあはせ候へども禁書は兎も角も難行にて讀みたくてたまらぬ時は何となく氣のとがめ候まゝそうと化學の教科書などの下にかくしてよむを常と致し候今度も此滑稽を繰返す事と思へば何となく滑稽らしくなく感ぜられ候あまり自分の事ばかり長々しく書きつらね候イゴイストは樗牛以來の事と御宥免下さるべく候 匆々

三月六日夜

廣瀬先生 硯北

芥川龍之介

八 三月二十八日 東京本郷向ヶ岡彌生町 西村貞吉兄 玉案下 (自筆繪葉書)

青海原藻の花ゆらぐ波の底に魚とし住まば悶えざらむか

三月廿八日

銚子にありて

芥川 狂生

九 三月二十八日(年月推定)

東京市本所區相生町三丁目六番地 山本喜譽司兄
廿八日銚子ニテ 芥川狂生 (繪葉書)

銚子の海は僕の戀人だ砂山に寐ころんで青い波の雪の様な泡をふきながらうねつてゐるのを見て限りなく嬉しかつた

宿の二階に居ると床しい海の吹きがきこえる夜は、琴の音が波の底の藻の花のさく國からきこへるかもしれない

龍 生

一〇 八月四日
消印五日 神奈川縣相模國高座郡鶴沼村大井別莊前加賀本様御内 山本喜譽司様 (葉書)

啓 はるばるの御狀しみじみ難有く覚え候、

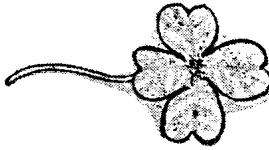
今四日小生も都に歸り四疊半の小齋に旅塵をはらひつゝ唯今本尊簡を拜讀致し候、

承れば御地に於て“江東男児の面目を御代表”遊さるる由いつにもなき大氣焔に恐れ入り候、

小生も疲勞のなほり次第槍ヶ岳登攀の行に上るべく口下は同行の諸君と共に“江東男児の面目を代表す”べき意氣を養ひ居り候、末ながら大兄の益々“江東男児の面目を代表せ”られむこと祈申し候 勿々

四日夕

芥川 狂生



明治四十二年

一一 十月二十七日 日光から 芥川道雪宛 (繪葉書)

修學旅行で日光へ來てゐます、

日光の建築は大していいとは思ひません、

陽明門も一向感じません 唯、杉の並木の青黒い間に朱の門の見えるのは一寸きれいです、明日中禪寺へ向ふ豫程 左様なら

廿七日

日光にて、 龍之介

一二 十二月二十九日(年月推定) 山本喜譽司宛 (封筒缺)

肅啓、

大晦日の晩は、なるべく早く早く誘ひに來給へ

今日は、僕が留守にするから若し平塚がうちへ來ると君の方へ行くかもしれないさうしたら款待してくれ給へ 新アラビアンナイツがあつたら大晦日に持つて來てくれ給へ 新年と旧年とにかけて通讀したいと思ふ 勿々

廿九日朝

龍 生

喜譽司 兄

明治四十三年

一三 一月一日 本所小泉町から 小石川大門町 西村貞吉様（自筆繪葉書）

遊びに來給へ柚味噌を御馳走してやるから

元旦

龍 生

一四 四月一日（年月推定） 山本喜譽司宛（封筒缺）

敬啓

家へかへつても矢張スースー寐てゐる事だらうと思ふ、

僕は四日から芝へゆくつもり明二日上野へ行かないか今芝へもつてゆく本を机の上へつみ上げて見て「随分あるなア」と感心してゐる平塚から手紙が來た

吞氣で驚いたと書いてある吞氣なのは君のせいだと返事をかいてやつた
勿論スースー寐るのもすつばぬいて置いた

明日朝（なるべく）誘ひて來給へ早く起きてまつてるから 匆々

明治四十三年

白梅のちる夕

龍 生

喜 譽 司 様

一五 四月十八日 山本喜譽司宛 (封筒缺)

肅啓

段々落ちつくにつれて段々勉強の出来るのは頗る同感にハ 小生も目下十時間内外をつゞけ居りハ

英文解釋法のつまらなきも左程苦にならぬ様に相成りハ但「左程」にて苦になる事は矢張苦になりハ

昨日曜は本所へ歸り晝まで西川と話しハ午すぎは独り西新井の大師より荒川の櫻を見に行きハ

櫻よりも西新井あたりの榛の木立の薄緑に芽をふきたると菜の花のさけると小さき女の子の田螺をとれるとがうれしく思はれハ

向島は朱鞘の大小に紺蛇目をかざせる定九郎やら白き袴に編笠したる何々劍舞團やら振袖に大きな帯を矢の字にむすべる御婆さんの御輕やらの横行にまかせありハ 押されたり押したりして漸歸宅致しハ時鼻の穴はまつ黒に相成居りハひき

其留守に平塚君來りハ由中塚を訪ねて留守再小生を訪ねて留守なりしとの事にハ 恐らくは三度目に君の家を訪ひて又留守なりしならむと思ひハへども如何にヤ

岡野君は大島に旅行せられハ 我等が新島行は多少先鞭をつけられたるの感有之ハ 伊豆の天城に入る落日の余光天を炙つて滿天火の如く紅なる由申し越しハ大に羨しく相成南國の春をいろ／＼考へ申しハ 君にも宜しくとの事にハへば宜しく申し上げハ

明治四十三年

尾城君京と奈良とに遊びて奈良に心酔せられぬ由承り及びぬ 動機は君と同じく風流饑法と斑鳩物語の由に御坐ぬ
若草の下に古代の歎きの聲をきくは奈良にぬ 殊に法隆寺の金堂の夕に立ちて黄昏の中に彩繪の壁を眺むる時千年
の時の歎きは深く我心を襲ひぬ

尾城君の旅は春の京と春の奈良にぬへば興趣さだめて深かりし事と存じぬ

入學が出来たら來年の春の休にはせめて奈良へだけでも行きたくぬ 今六疊の小齋に蹲りつゝも奈良を思へば 菜
の花の中に立てる法隆寺の古塔髣髴として眼底にうかび來りぬ

五月一日の淡交會へは御出席相成ぬや 小生はあゝ云ふ席上に出るのはいつも何となく恐ろしく感じぬへばとても
一人にては參られ相も無之ぬ 西川は行かずとの事不相變天を仰いで書を繙き居る事と存じぬ 御返事は今度の日
曜に御出の時を待ちてうかゞふべくぬ

此頃は詩集にも歌集にも遠ざかりぬ 動搖はかくして死に至る迄續くならずやと疑はれぬ

空腹高心にては詮方なくぬまづ語學の力でもつけるのが肝要とさとりぬ さう思へば英文解釋法に苦しむのも仕方
がなくぬ 勿々

十八日朝

喜 様

龍

一六 四月 芝から 山本喜慶司宛

Dear Sir

とうとう英文科にきめちやつたもう動かないつもりだ

文科の志望者は年々少くなつて今では一高が辛うじて定員だけでもしくは定員を少し超過する位で地方には殆ど定員だけの志望者がないと云ふ、これと同じ運命にあるのが理科だ相だ

何處迄所謂 Industrial になるんだかわからない農科は近來秀才を吸収する新傾向を生じた相だ其一人が君なんだよ、大に得意になつていゝ

音楽がきゝたくなつた大へんきゝたくなつた今日も青年會館に音樂會がある行きたいなと思つたけれどやめにした、一寸變な氣がして思切つて出掛る勇氣がない、何時かもつきゝたくなつたら君に頼むから一緒に行つてくれ給へ獨ぢや何年たつたつて行けつこはない

勉強してゐるだらうね僕は矢張やれさうもないタイイスだけは讀んでゐる

來られたら來ないか義理でいいや來たンぢやアいやだ來てもかたくなつて遠慮しちやアいやだ遠慮しなくつても來てすぐ歸るやうに忙しいンぢやアいやだ

中々來かたが六づかしいンだよ大門行へのつて宇田川町で降りる(新橋——源助町——露月町——宇田川町)降りて少し先へ行くと道具屋と湯屋との間に狭い横町があつて湯屋の黒い羽目に耕牧舎の廣告がある其横町を向うへぬけると廣い往來へ出るさうすると直耕牧舎の看板がある狭い横町があるからそれをはいると右側に  が立つてるその向うの右側に花崗石を二列に敷いた路次があるそれをはいるとつきあたりに門があるその門の内へはいるとどこかの代議士の御妾さんの家へはいるから其門をくゞつちやアいけない門の左に格子戸がある格子戸をあけると左に下駄箱があつて其上にロツキングの馬のつかつてゐる

此處迄來ればもう間違なく僕の机の所へ來られる筈だ芝の家の玄關がこれだから

平塚の所から手紙が來て肋骨はぬかずにすんだとかいてある當分寝てゐるさうだ序があつたら見舞に行つてやると

明治四十三年

いゝあの黒犬さへ居なければ僕も行くンだけれど

さぞ細くなつたらうと思つたら涙が二しづくこぼれたでも二しづくきりつきやこぼさなかつた

本當に來られたら來給へ來る前にはハガキで知らせて呉れ給へ待つてゐるから

これからちよい／＼手紙をかく淋しくなれば方々へ手紙を出す其度に返事はいらぬ此方から出した手紙も讀ンでも讀まなくつてもいゝ用がある時は狀袋に特にしるしをつけるから

末ながら皆さんによろしく 匆々

四月花曇の日

喜 兄

川やなぎ薄紫にたそがるゝ汝の家を思ひかなしむ

ヒヤシンス白くかほれり窓掛のかげに汝をなつかしむ夕

夕潮に春の灯^{あかり}うつる川ぞひの汝の家のしたはしきかな

一七 四月二十三日 本所區相生町三ノ六 山本喜譽司様
芝にて 青萍狂生（葉書）

喜兄

四月廿三日

朝から來給へ

平塚にも來るやうにさう云つてやりました、

今日は家中妙華園へ何とか云ふ花を買ひにゆきました 僕にも行けと云つたのを斷^{つて}りましたがこの手紙をかきな



龍

がら「行けばよかつたつけ」と思つてます、

チュリツプが四つともさきました一つ鉢へうえたので少し變ですが紅い奴が一つ黄色い奴が一つしほりが二つ
紅い奴は甘い香がします、

You see that man is all alone against all in the world.

メーテルリンクの中で「光」の精が森の樹の精にいちめられた小供にかう云つて教へるのですが面白いから御覽に入れ
ます、こんな風に深奥な自然觀の片鱗が御伽芝居の中にちらばつてゐるのを見ても單なる御伽芝居でなくシム
ボリカルな所の多いのがわかります、來月は丸善へ來ますから獵人日記をよんだら是非よんで見給へ、匆々

一八 (年次推定) 山本喜譽司宛 (封筒缺)

敬啓

油屋の小僧さんはまだナシヨナルの1を1—3ばかりやつたきりだから文法も發音も何にも話したつてわからない
唯其時其時の譯と和文英譯なら Subject と predicate の關係を話してやつて下されば結構だと思ふ どうせ物にな
る英語ぢやアないが唯やらうと云ふ小僧さんの熱心を汲んでやるだけだ
菊池の慶應の制服を着た様子が目に見えるやうだ 慶應へ行つた人はのん氣だなアと思ふ 時計がかち／＼なつて
ゐる 矢張勉強だ 人の事を談まずにこつ／＼やるより外に仕方がない
昨日は英文解釋を三枚やつたら嫌になつた 二時間晝寐をしてあとは弟と「おばけ」をこしらへて遊んだ 顔は龜
の子箆に紙をはつてこしらへる 手はミットとグローブ(片ちんばで少し變だ)胴中は夜具 浴衣をきせて髷を上
にむすんで椽側のすみへぶらさげた おばけの肩がいかつてゐて可笑しい